

紫式部と絵

原田芳起先生の頌壽記念号に、拙文を捧げることが光栄に思います。三十年來の知遇を顧み、数々の学恩を賜わったことを厚くお礼申し上げます。先生は長いご生涯を、学究一筋に貫かれ、今日益々ご健康で研究にご専念、「平安時代文学語彙の研究」―「同統編」の大著により、時を同じうして文学博士の称号を得られた。このお慶びの二重奏を、心から祝福申し上げます。

ただ今私は、学生と源氏物語の絵巻の巻を読んでいます。今春京都で幅された「源氏物語の美術展」には、深い感銘を受け教えられる所がありました。それにちなみ、紫式部と絵との関わりについて述べたいと思います。

紫式部の生没の年は明らかでないが、没年を長和三年（一〇一四年）頃とすると、源氏物語は十一世紀始には出来ていたわけである。今日残っている最古の源氏絵は、十二世紀半ば藤原隆能等数人筆と推定されている源氏絵巻で、模本や写真等では目に触れる折は多いが、展観によって、実物に対面できた事は有難く、王朝文化を目のあたりに見、王朝人のため息を聞く思いであった。

中国絵画の模倣から脱して、日本の風景や風俗画の様式が作られ

竹内美千代

た大和絵の完成期に、紫式部は生きていた。彼女はどのような絵を日常親しく、眺め画きしていたのか。王朝貴族社会の女性の鎖された世界を考えると、絵に対する愛翫、憧憬、鑑賞の度合が、いかばかり濃密であったか想像に余りあると思う。

彼女の作品に現れた絵について検討してみよう。作品成立の時期からいえば、源氏物語・紫式部日記・紫式部集の順であるが、無作為の自然な状態から、作者の意図によって構築された物語へと見て行くので、この逆の順序で進めることになる。

紫式部集は、彼女が晩年に、自撰したものであらうと考えているが、その中から絵に関わる歌と詞書を挙げると、五例である。

1 歌絵にあまの塩焼くかたをかきて、こり積みたるなげ木のもとに、書きて返しやる

四方の海に塩焼くあまの心からやくとはかかるなげきをや積む
2 絵に、物の怪つきたる女の、みにくきかたかきたる後に、鬼になりたるもの妻を、小法師しぼりたるかたかきて、男は経よみて物の怪せめたる所を見て

亡き人にかごとをかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ

3 絵に、梅の花をみると、女の妻戸おしあけて、二三人ゐたるに、みな人々ねたるけしきかいたるに、いとさだすぎたる

おもとの、つらづあついて、ながめたるかたある所

春の夜の闇のまどひに色ならぬ心に花の香をもそめつる

4 同じ絵に、嵯峨野に花みる女車あり。なれたるわらははの、萩

の花に立ちよりて、折り取る所

さを鹿のしかならばせる萩なれや立ち寄るからにおのれ折れ伏す

5 世のはかなき事を歎くころ、陸奥に名ある所々、かいたるを見て、しほかま

見し人のけぶりになりし夕より名ぞむつまじきほがまのうら

用例1は歌絵、2・3・4は物語絵、5は名所絵である。歌の順序からみて歌絵は宣孝との婚前交際中であり、物語絵の歌は夫死別のすぐ後に続いて居り、名所絵の歌も同じ頃の作である。すなわち青春時代から寡居の頃、彼女生涯の最もロマンの香りの豊かな時期に当る。絵に親しみ感銘をもって眺めて居たと思われる。家集にはこの他には絵に関するものがない。

歌絵は吉沢義則博士は「書きのせる歌意を表わした装飾絵であつ

て、歌を書くための下絵」(「源語釈景」と解されたが、ふみに画かれた海浜の塩焼く情景で、積み上げた投木の所に、四方の海の歌を書いて返歌したのであるから紙絵である。恐らく芦手のような絵に調和した文字で書かれたのであろう。この詞書は、歌絵を描いたのが彼女とも、宣孝とも解される。「書きて返しやる」というのは、投木の所に歌を書いて、その文を返したとの意で、この歌絵には先に宣孝の歌が書いてあったので、更に彼女が返歌を書いて「返しやる」と、二首の歌がしたためられて、絵と歌と、筆蹟を楽しんだものと思われる。とすれば絵は宣孝がかいてよこしたことになる。これは明石で光源氏の書いた消息に絵が画いてあり、返事を書くようにしてあったのと同じで、彼女は自らの体験を創作の中に織込んでいるわけである。

物語絵の用例は、家集の詞書だけでは、何という物語の場面なのか明らかでない。恐らく今日では散佚したものであろうか。用例3と4の「同じ絵に」とあるのは、同じ物語の異った場面を言うもので、彼女が絵物語に傾倒した日々が思われる。絵を見て物語の無限の広がりを読み取り、その人物の心を歌によむ。梅が香をめぐるさだ過ぎたお許は、色ならぬ心情であること、過去の恋の経験と現在の境遇の変化を示してどこか彼女の面影がある。この物語絵の歌は歌集でも充実した箇所の一つであつて、夫死去後の孤独を、物語に慰めを求めて熱心に読み、自ら試作していた頃だと思ふ。それはこの詞書が、単に説明にとどまらず、背後の物語の内容を暗示する書きぶりである所でも感じられる。

用例5の名所絵は屏風絵か、障子に描かれたものであろう。名所や歌枕や四季の絵を描いた屏風が室内にあって、塩焼く煙の立ち上る塩釜の浦の景色を、夫を偲ぶ思いで眺めて居り、彼女の生活が物語中の絵ほど豪華なものでもなくとも、絵に囲まれ絵を眺めて追憶に浸り、悲しみを癒していたと思われるのである。

二

紫式部日記の執筆期間は、かなり明らかに知られる。一条天皇の寛弘五年（一〇〇八年）七月、中宮彰子に従って藤原道長邸に下つてより、九月十一日、後一条天皇御生誕前後の有様を主として記述し、翌年正月三日の記述の後、女房たちの批評及び消息文と六月頃までのこと。寛弘七年は正月の行事の記述である。始の年は日記としてその都度書いた所が多いが、後から追記したものもあり、書き終りを寛弘七年とするならば、作者三十六歳より三十八歳頃までと推定される。場所は中宮の後宮が主であるが、道長の土御門邸へ里下りされて居り、紫式部が私邸に下りている折もあり事実を知るのに好都合である。

紫式部日記の中に見える絵の用例は七例である。

1 辨の宰相の君の戸口をさし

のぞきたれば、昼寝し給へるほどなりけり。……絵にかきたるもの、の姫君の心地すれば「物語の女の心地もし

譬 喩

物語絵の 中の姫君 (物語絵)

給へるかな」といふに、

2 よろづの物の、曇なく白きお前に、

人のやうだい、色合などさへ、けちえんにあらはれたるを見渡すに、よき墨絵に髪ども生したるやうに見ゆ。

譬 喩

若宮誕生の折の女房の白装束 (墨絵)

3 簾をすこし引き上げて内侍二人

いづ。その日の髪上げ、うるはしき姿、唐絵を、をかしげにかきたるやうなり。

譬 喩

行幸の日の内侍の姿 (唐絵)

4 心を尽してつくるひけさうじ、

劣らじとし立てたる、女絵のをかしきにいと似て、

譬 喩

行幸の折の女房の容貌 (女絵)

5 御五十日は、霜月の朔日の日、

例の人々の、したてて上り集むたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとよう似て侍りし。

譬 喩

五十日の祝に中宮の御前の有様 (物合の絵)

6

五節の辨という人侍り。平中納言の、むすめにかしづくと聞えしが、絵にかいたる顔して、類いたうはれたる人の、まじりいたうひきく、顔もこはと見ゆる所なく、いと白う。

譬喩

五節の顔の顔に類たる顔
(女絵)

7

十一日の曉、御堂へ渡らせ給ふ。御車には、殿の上、人々は舟に乗りてさし渡りけり。教化行ふところ、山、寺の作法うつして大懺悔す。白い塔など、多う絵にかいて、興じ遊び給ふ。上達部多くはまかで給ひて、すこしぞとまり給へる。

中宮の御堂詣。
仏に供養する白い塔の絵をかき
(紙絵)

用例7は、本文に異同が多く疑義のある所であるが、通説によつて、仏の供養のために白塗の小塔の代りに、紙に白い塔を画いたと解す。敬語の主は誰か、通説では中宮であるが、「多く絵にかいて興じ遊び給ふ」というのはいかがであろう。萩谷朴博士の「紫式部日記全注釈」には、上達部と見て、「興じ遊び給ふ上達部」と、下に續けて解されている。散華の花びらに白印塔しよいとうなどを、絵にかい

て遊び興していらっしゃる上達部も、多くは退出され云々となる。

どちらにしても絵を画くことで、法要の際の供養のために描く簡単なものを、何枚も画く特殊な場合だが、「興じ給ふ」という、絵を描くことへの平安貴族の姿勢がうかがわれる。

あとの六つの例は譬喩に用いられていて、現実の有様や人物の容姿が、絵に描かれたそれに似ているというのである。1は物語絵の姫君に、6は物語絵の女の引目鉤鼻の顔にそっくりだという事。

女房の容姿も墨絵、唐絵、女絵とそれぞれの実物が、絵にかいたように美しく、興味をそられるというのである。用例1の辨の宰相の君の昼寝姿は、絵物語に画かれた姫君のようだという。源氏物語常夏の巻には、十七歳の雲居の雁の昼寝の美しく愛らしい姿が描かれている。5の物合の絵は物語絵か、屏風絵か。室内に籠っている女性たちには、実物よりも、絵によって様々の情景を知っていたであろう。歌枕も、実際に知らぬ山や地名をも、名所絵や色紙形の歌で、親しんでいたであろう。紫式部日記執筆の頃には、源氏物語の前編は出来上っており、引続き書き継がれ、宇治十帖と並行する部分もあつたであろう。寛弘五年十一月の冊子作りを、源氏物語とするならば、やはり源氏の大部分が書き終えられていたと考えられる。この後の里居の述懐には「こころみに、物語を取りて見れども、見しやうにも覚えず」と、物語熱の喪失を告白している。為時の住居で見て暮した絵と、宮仕え以後現実に見た最高級の美術画は、その芸術性の豪華さ多様さに於て格段の相違であつて、彼女の鑑賞批評の目を高めたと思う。栄華物語初花の巻に記されている、

中宮彰子や妹君妍子（三条后）の絢爛豪華な内内の調度を、彼女は見る機会があつたはずである。およそ十年間の宮仕生活は、彼女に広く高い目を育て上げたと思うのである。

三

源氏物語の95の用例を検討して、その内容の豊富なのに感心した。彼女の家集や日記に比べ、スケールの大きさ多彩さには随分と

径庭がある。作中人物によって展開される絵画の世界は、王朝大和絵の最盛期の実状であり、当代貴族の絵に対する熱意と愛着と鑑賞の高さを示している。彼女が物語の中に展開した教育論・女性論・学問論・物語論・絵画論・筆蹟論・音楽論等は、今日なお傾聴に値するものであつて、これらに対する彼女の理想や抱負を語るものである。絵の用法を表示すると左の通りである。

分類	語	重なる用法・用例
I 絵 一般的 な広い 意味 38	ゑ 24 { ゑなど ゑども } おんゑ 9 { おんゑなど おんゑども } ゑがきたる かたをかき	○絵画一般をいう ○絵をかくこと 絵の技術 ○絵を好む ○絵は余技（あだごと） ○絵をかいて慰める ○絵を見て慰める ○若い女や童女の慰めとする（雛遊びや絵） ○貴族たちは絵を多く持つている ○屏風の絵を日常見て生活している ○絵合に絵を集め選択する ○絵合に上手に新作させる ○扇には絵をかいてある
II 絵 下歌 絵 1 1 2 { 下歌 } 絵 絵 像	4 1 5 1 3 8 5 11	昔覚ゆる人形をも作り絵にもかきとめて、 葦手歌絵を思ひ／＼に書け 御屏風四帖に、うちの御手書かせ給へる……下絵のさま （宿木） （梅枝） （若菜上）

III 譬 喩	の も る か わ の 類 種 の									
	41									
絵にかまほしげなり 絵にかけるやうに かきたるやうに かきたらむやうなるに かきたらむやうなるに 5	紙 絵 2	おん 絵 1	四季の絵 2	墨がき 2	月次の絵 1	作り絵 2	ゑなど 8	物語絵 2	絵物語 1	かたかき 1
	14 物語絵									
	紙 絵	唐 絵	四季の絵	墨がき	年中行事絵	彩色画	消息文に	絵日記	蒔 絵	函 案
	女 絵	3	1	1	1	1	1	1	1	1
	(冊子 巻)									
風景を 絵にたえ をかしき侍重の姿好もしう殊更めきたる... 花の中にまじりて朝顔折りてまゐる程など絵に かまほしげなり 住まひ給へるさま唐めきたり所のさま絵に かきたらむやうなるに ●唐絵 (夕 顔) (須 磨)	ただかくおもしろき紙絵を整ふる事を 長恨歌王昭君などやうの絵は(●重出?) (絵 合)	例の四季の絵も古の上手どものおもしろきを 絵所に上手多かれど墨書きに選ばれて (絵 合)	例の月次の絵も見なれぬさまに (繪 合) (掃 木)	此頃の上手にすめる千枝常則など召して 作絵を仕うまつらせばや (繪 合)	唐守はこやの刀自かくや姫の物語の絵にかきたるをぞ (未摘花)	芹川の大將のとほ君の女一宮思ひかけたる... 思ひわびて出ていきたるかたをかしようかき (蜻 蛉)	ゑを書き集めて思ふ事どもを書きつけ返りごと 聞くべきさまに (明 石)	二条の君も絵をかき集め給ひつつ、わが御有様を 日記のやうに書き (明 石)	蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるもの 本文にはなく 巻名 (東 屋)	物をしたかた絵様などもご覧じ入れつつ をかしげなる女絵どもの、恋する男の住居など 書きませ (梅 枝) (繪 角)

95	16	て し と						
		絵にいとよくも似たる	絵にかきたらむさま	絵にかかまほし	絵にかきたるもの姫君	絵にかけける……筆限りありければ……なし	絵にかかば……絵師はかき及ぶまじ	絵にもかきとめがたからむ
91		1	1	1	2	1	2	1
重出 4	●印	(対校源氏物語用語索引)						
		いれなき	てあつ	界が	は限	絵に	えたと	人物
		5				4	7	
		●絵かく事と重出(筆の行く限りあり)						
		(絵合)						
		●紙絵 (絵合)						
		●桐壺 (桐壺)						
		●若紫 (若紫)						
		●唐絵 (胡蝶)						

用語でまとめると、糸 66 かた 6 糸の名称(歌絵等) 19 計 91
 語 重複するものもあり、95の用例を三類に分けた。一、絵画一般
 二、種類別にみた様々の絵 三、絵を譬喩に用いたもの である。
 一は広く絵を指している場合であるが、絵に対して作中人物の対
 応の仕方を用法の欄にまとめてみた。源氏物語は貴族の物語である
 が、彼等はいくつかの絵を持っている。邸内の屏風・障子には面白い絵
 がかいてあり、日常その絵を見、その色紙形の和歌や詩をよく味わ

って暮して居る。冊子・巻子の物語には絵があり、取り出して人に
 も見せ自身でも眺めて楽しんだ。女性、殊に若い人幼い人は絵を愛
 好し、手習と共に絵を描いて慰みとした。遊遊びと絵は離れ難い女
 の楽しみとしたことは、幼い紫の君、女三の宮、女一の宮、浮舟な
 どが、心から絵を楽しむ傾倒している。また男性も貴族の嗜みとし
 て絵の技倆を持っていたことは、光源氏、帥の宮、朱雀院、冷泉
 帝、匂宮等がそうであった。しかし絵は教養のための余技であつ

吉沢 義則 著 による)
 木之下 正雄

て、晴の場合の絵は専門の上手に製作させるが、貴族たちは絵心があるもので、構図や下絵等に指示を与えることもあった。

二の絵の種類は豊富で、15種の様々の絵がある。形態の大きい屏風障子の絵、小さい紙絵（絵巻、冊子、葉子）。内容からは月次の絵、四季の絵、名所絵、物語絵、女絵、絵像。用途からは下絵、歌絵、詩絵、絵様。色彩からは、墨書、作り絵と網羅されている。絵合という語は本文にはなく、巻名だけである。墨絵は日記に見えるが、物語では墨書とあり、作り絵に對した語である。唐絵に對する大和絵という語はないが、唐絵の2例と唐絵の名称はないが、表の譬喩の下の須磨の巻と胡蝶の巻の2例が唐絵をさして居るので、4例以外はすべて大和絵のわけである。

唐絵から脱して、日本の風土人物を日本的に様式化した大和絵がこの時代に完成し、立派な料紙に、絵も書も和歌も名人上手によつて作られ、装幀も平家納経に見るような豪華な作品が、後の入内の調度には整えられたことが知られるのである。

三の譬喩の用法15例中、風景を絵に譬えたもの7、人物の容姿を絵に譬えたもの4で、「絵にかゝまほし」「絵にかけるやうなり」「絵にいとよく似たるさま」の類である。今日でも用いる表現であるが、実感としてはより強いであろう。写真も映画も無い時代だから、美しい風景や邸内の情景に接すると、ただちに絵が想い起され、人物の姿に物語絵を思ふのである。3例は女君、1例は紫上と源氏で、「絵にかかまほしき御あはひなり」と、女絵の男女の睦まじい情景に譬えている。紫式部日記の譬喩の6例も女を譬えたのが5例

で、美しい容姿や、あはれな感動的な場面を表現している。絵は形象を写すだけでなく、情調や詩情という絵の心を重んじている。絵に限界を認めた5例は、絵に限らず筆にも口にも尽されぬという表現の限界でもあるが、これは後に述べよう。

四

絵合の巻については、古く河海抄以来、清水好子氏、玉上琢弥博士、秋山光和氏、石原昭平氏、小松茂人氏等の勝れた論考で述べ尽されている。紫式部が現実生活の上で、どのように絵とかかわり合ったかを考え、それが物語創作の上にとどのように生かされているかを見るべく、私は三作品の「絵」を見て来たのであった。

源氏物語で絵を大きく取り上げているのは、帚木の巻の絵画論と、絵合の巻とである。殊に一巻を挙げて絵合と取り組んだ作者の意気込みは旺んといわねばならない。絵合の巻は朝日古典全書本で16ページ。他の巻と比べて短い方であるが、大部分が絵合に関する纏まりのよい巻である。後宮での優雅な行事を描き、源氏の推す齋宮女御方が勝つことで、光源氏の権勢が栄えることを示した物語の構成上大切な地位を占めている。

冷泉帝の治世を理想的なものとして、作者は描くのであるが、帝はこの巻で13才、権中納言の女、弘徽殿の女御は先に入内していて14才、お似合いの睦しい御中である。六条御息所の忘れ形見の前齋宮は、22才、先帝朱雀院の御執心を承知の上で、源氏は親代りとなつて入内をはかる。母后藤壺中宮は、幼帝のために、御後見の出来

る大人びた立派な后を望んで、実現したのであった。齋宮女御がどんなに美しく高貴であっても、御夫婦の結びつきは自然には行き難い。その隔たりを越えさせたのは絵の趣味であった。帝は殊の外絵を好まれ、画才がおありであった。絵の堪能な齋宮とは、絵への共鳴から親近感、敬愛の情が自然に生まれ、「書き通はさせ給ふ」「御思ひまさる」というように、若いお二人を美しく結びつけている。弘徽殿の女御の方では、父権中納言は女御のために名画を集め、財を投じて上手を召して新作を画かせる。帝の寵愛を争って絵を集めて張合い、双方の女房達は絵の事に熱中し、その評判は大変だという風に、雰囲気盛り上げて絵合に入る。

絵合の実例について、清水好子氏は、「後拾遺集に見える一〇五〇年の正子内親王家が最古であり、宮中での公式の行事の実例は、源氏執筆の際にはなかった」と述べていられる。作者は帚木の巻で絵画論を展開したが、絵の最高に豪華な行事として、後宮を二分して競い合う絵合は、女のための源氏物語には是非描いて見たかったし、読者の願いでもあったであろう。それには政治も文化も理想の聖代の繁栄を讃え、後世にも範たるべく、まことらしく莊重にするために、村上天皇天徳四年（九六〇年）の内裏歌合を準拠としてゐることは、古く河海抄以来先学の方々が村上御記・殿上日記・仮名日記に照合して明らかなである。

絵合は二回催される。始めは三月十日頃、中宮の御前で行われ、物語絵合であった。その模様は具体的に述べられている。初は竹取物語と宇津保の俊蔭を合わせ、左方は古代の名人、巨勢相覧の絵

に詞は紀貫之の筆、右方は当代の名手飛鳥部常則の絵に、小野道風の書であった。定められた三人ずつの女房が論議して、右方が先ず勝を制した。

次は左伊勢物語に右正三位を合せて争い、歌で主張し合ったが旗色のよくない左齋宮女御方に、中宮が味方して歌で判を下され、やっと左右は持となった。互に勝を争う女房の白熱した気焔はわかるが、現代人の見方からすれば外的の感がある。絵の論議ではなく登場人物の身分や行為など、いかにも「女言にて乱りがはしく」争うものだと思われる。

二回目は源氏の提案により、主上の御前で勝負を決しようと、史上空前の宮中での絵合が催される。三月二十余日、帝の御前の絵合が重々しく、きらびやかに行われる。場所は女房の侍である台盤所に玉座を設け、左右の絵を御前に運び出す。左は紫檀の箱に絵を納め、蘇芳の花足の台に葡萄染の唐の綺の打敷を敷いた上に載せ、台の下の敷物は紫地の唐の錦という、重厚で高貴なつくりで色調は赤と紫。これを運ぶ童女も赤色に桜襲という赤系統の服装であった。右は絵の箱は沈、浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、と瀟洒軽快で当世風。青が基調になっていて、童女も青色に柳の汗衫であった。帝つきの女房も装束の色を左右に分けて控え、殿上人は後涼殿の簀子に、左右に心を寄せて侍している。

儀式はいかめしいが、優雅で花やかな雰囲気のうちにも、互に負けじの緊張が漲っている。中宮も障子をあけて御覧になり、判者は帥の宮。内大臣の光源氏、権中納言が祇候して絵合が始まる。この

左右の光景は、天徳歌合せの記録にそっくりであって、作者は絵合にまことらしい実感を盛込んだのであった。紫式部日記に寛弘五年十一月一日の若宮五十日の祝に、盛装した女房達の参集している中宮の御前を、「物合の所にぞいとうよう似て侍りし」言っている。様々な物合や歌合の流行した当時、絵合は女性の関心事であり、恰好の物語の材料でもあった。はかなき遊びわざであっても、最高に豪華で優雅な絵合の有様を、宮仕で得た経験を生かして迫真力をもって描き出している。

ところが絵合の進行については、具体的な描写はなく、何が合わされたか、論争の状況はわからない。とに角、源氏や権中納言が力を尽して用意した絵が、次々に合わされたが伯仲して勝負が決しない。ついに「定めかねて夜に入りぬ」となり、最後の巻に源氏のかいた須磨の絵日記が出された。

かかるいみじき物の上手の、心の限り思ひすまして静かに書き給へるは、たとふべきかたなし。親王よりはじめ奉りて、涙とどめ給はず。その世に、心苦し悲しと思ほしし程よりも、おはしけむ有様、御心に思しけむ事ども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々磯の隠れなく書きあらはし給へり。草の手に仮名の所々に書き交せて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる、類ゆかしく、誰も他事思はず。さまざまの御絵の興、これに皆移りはてて、あはれにおもしろし。よろづ皆おしゆづりて、左勝つになりぬ。(絵合)

須磨の絵日記で勝つという作者の想定が面白いと思う。何だかは

ぐらかされたような、やっぱり「源氏の物語だ」という感じがする。読者の意表に出る作者のよく使う手である。帝の御前の絵合に出された絵は、月次の絵、四季の絵で、公式の年中行事の絵であった。中宮のお前の物語絵合に比べて、宮中の行事という歴史的事実を踏まえたもの、それに四季の風物を配して節会を画いた格式あるものである。須磨の絵は、光源氏の若かりし日の流離の生活の絵であって、須磨明石の海浜に赴き、心をこめて自ら写したもので、私生活ながら、歴史的事実を画いていて、帝の御前の絵合に出品して恥じぬものと作者は考えたのである。源氏のこの絵に対する自信は大したもので、画き集めた相等の量を、大切に都に持ち帰り保存し、紫上に見せ藤壺中宮にも御覧に入れようと思っていたのだった。須磨の絵は二つの点から注目される。

一、源氏の流謫生活を絵にしたので感動を生んだこと。

二、草書に仮名を交ぜた歌の入った日記の体裁を持っていること。

光源氏はすべてに優秀な人物で、絵の技術の秀れことは勿論、絵合の後に帥の宮との絵画論に述べられているように、須磨明石に山がつの生活をしたため、実地に海辺に住み深い味わいを見たので、絵が上達したと言っている。単なる風景画でなく、実景に即して長期間学んでいる。それも流謫という事情のもとに、悲愁の心で余念なく画いたものである。源氏の今日の繁栄あるは、須磨明石の忍従の賜物である。その絵の前には何人も涙が止まらなかったという。史上には左遷の憂き目を見た人が、源氏のような繁栄を見た例はない

が、作者は源高明や、菅公等の配所生活の詩文書画を、現実にも人の共感と感動を呼ぶことを書こうとしたとも思われる。ここに至れば表現を超えた画き手の真情が、見る者の心を強く捉え、勝を制したのである。

次に絵日記であったことについて見ると、男の書く漢文の日記のような、整ったものでなく、生活の中にある風景や自分の姿等を絵にし、その時の心情を吐露した歌や詩、詞などを、自由に草書と仮名交りに書いたもので、絵と歌や文が相補い調和して、その時の真実の思いを語っているというのであった。それは光源氏のみならず、紫上も都で「同じやうに絵をかき集め給ひつつ、やがてわが御有様を、日記のやうに書き給へり」（明石）とあって、「わが有様」とは紫上の自叙伝というべきものである。源氏は明石からの消息には、絵に歌や詞を書き、返歌が聞かれるような趣向にしてあり、それは見る人の心にしみるはずの絵だったとある。紫式部集にある歌絵に歌を書いて宣孝がよこしたのに、海人の塩焼く投木の所に、彼女が返歌を書いてやったという体験を生かしており、それらの絵入りの消息が、どんなに相手に感動を与えたかを語っている。

最後に絵に限界のあることを述べているのは、前掲の表の終りの5例である。「いみじき絵師といへども、筆限りありければいと匂ひなし」（桐壺）とか、「筆の行く限りありて、心よりは事ゆかず」（絵合）「紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへを見せ尽さぬものなれば」（絵合）等、絵に限界のあることを認めるものである。これは芸能のいづれにも共通する所であって、造型芸術が

実物以上に表現する面を持つと共に、内容、こころの表現には限界があり、それを補うものが詞であり歌や詩である。従って絵と文学の緊密な一体化の上にこそ、最上の表現が遂行されるというのである。須磨の絵日記は、双方が相扶け映発し合っているののである。古今の上手の筆になる公式の年中行事絵の立派さよりも、一人の人間の私生活をあはれ深く描いた須磨の絵日記の方が、見る者の心を強く捉え感動させたというのは、作者の持論である。

物語は女のもてあそぶものとして、低く見られていた当時、大作家源氏物語を書かせた作者は、物語こそ人間の真実の心を語るものだという文学観を持っていた。「日本紀などは、かたそぼぞかし、これらに（物語）こそ道々しくくわしきことはあらめ」という、螢の巻の文学論へ、須磨の絵日記はつながるものである。

（一九七五・七・一五）

参考文献

- | | | |
|----------------|-------------------|-------|
| 吉沢義則
木下正雄 著 | 対校源氏物語用語索引上下 | 平 凡 社 |
| 日本 古典 全書 | 源氏物語 | 朝日新聞社 |
| 日本 古典 文学 大系 | 源氏物語 | 岩波書店 |
| 萩谷 朴著 | 紫式部日記全註釈 上下 | 角川書店 |
| 玉上弥弥著 | 源氏物語研究「屏風絵と歌と物語と」 | 角川書店 |
| 同 | 源氏物語事項索引 | 同 右 |

同	源氏物語評釈	総合	同	右
特別展覧会	源氏物語の美術	解説	京都国立 博物館	立
清水 好子	源氏物語絵合巻の考察	「文学」昭和36・7		
石原 昭平	総合 源氏物語講座 三巻	有精堂		
秋山 光和	源氏物語の絵画論	源氏物語講座 五巻	同	右
小松 茂人	源氏物語の芸道論	源氏物語の探究	風間書房	
吉沢 義則	源語釈泉		誠和書院	